幼児期の経験

―その導き方―

澁谷鶯谷さくら幼稚園

松村康平

一

【問題】

同じ教育が同じ実を結ぶとは限らない。教師なり父母なりの取り扱い方が殆ど同じでも、その結果が、一人にはよく、他の一人には悪い場合がある。このことは、教育が、個性に即して行わるべきことを、私たちに知らせる。それ許りではない。同じ人にも、その時の気分、その人が置かれている場の如何によつて異なつた効果をもたらす。

私の手もとには、二十歳前後の人たちによつて書かれた「体験記録」があるが、記録の中で効果をあげている方法も、人により、時と処によつて、それを用いても、必ずしも成功しない。けれど、それは、私たちに多くのことを教えてくれる。私はここに、数例を選んで紹介しよう。読者はこれをもとにして、子供たちをどのように導いたらよいか、考えてほしい。また、この記録が、研究討議の機会をつくることを、私は望んでいる。今回の私の務めは、主として、体験記録の紹介と、研究課題の提出にある。

二

始めに、叱られると思つていたのに叱られなかつたことが、よい結果をもたらした例を取りあげよう。

叱られなかつた効果

学校へあがる前、多分五歳頃だつたと思います。丁度その日は、家の人が留守で、祖母と私と、二人きりでした。お十時に、祖母は、戸棚から「さくらんぼ」を出してくれました。それを食べてしばらくすると、祖母は洗たくをしに、お風呂場へはいつてしまいました。私は食べたいというよりも、きれいな赤い色に魅力を感じて、戸棚をそツと開けてみました。そこには、少ししかありませんでしたが、きれいな「さくらんぼ」がはいつていました。私は二ツ三ツ取つて、いじつ

ていましたが、そのうちに柄と実とが、ポツリと離れてしまいました。私は、その「さくらんぼ」を、返そうかなと思いましたが、こわれたものをいれても仕方がないと思つて、実を口にいれました。その味が妙においしかつたので、今度は、どんどんつまんで、口にいれました。そのうちに、お風呂場の戸の開く音がしたので、私はとつさに、叱られると思つて、戸棚も閉めずに、玄関に飛び出してかくれました。祖母は、すぐに私の仕業を見つけて、「アラアラ、大きなねずみが、さくらんぼを取つてしまつた」と、大きな声で言いました。私は、とても悪いことをしたように思つて、シクシク泣き出してしまいました。祖母は私を見つけて、「欲しいものは上げるから、だまつて取つたりしないで、下さいつて言えばいいのよ。あそこにいれてあつたのは、みんなあなたの分だから、後で又上げようと思つて、しまつておいたのよ。だから、もう、泣くのはよしなさいね」と、やさしく言いました。

たしかに叱られると覚悟していた私は意外にも叱られなかつたので、嬉しくて、それ以後、私は、欲しいものがあると一応何でも欲しいと、はツきり言うようになりました。欲しいと言つて叱られたことはありませんし、ことわられても、大して気になりませんでした。あの時、祖母が、私の行爲を叱つたら、それから後、陰険な心をもつたかも知れないと思います。（女、T・I）

次には、大人の思い違いが、子供に悪い影響を与えた例を、述べよう。

疑われたその結果

たしか六歳の頃でした。

或る日、外から帰つて、母のところへおやつをもらいにいくと、母は台所で、祖母と女中と三人で、何かしていました。私の顔をみると、母はちよつと恐い顔をして、

「あなたでしよ。お茶の間にあつたお菓子を食べちやつたの。もうあなたにば、おやつは上げません。」

私は驚いて、そんなことは絶対にない。お昼ごはんを食べてから今までずツと公園に行つて、遊んでいたのだと言いますと、母は信じてくれたらしく。

「そう、じやあ、誰でしようね」と言いながら、おやつをくれました。すると、祖母は、「きつと、ねずみだろう。頭の黒いさ」と言いました。「ほツぺたの赤いね。」

私が知らん顔をして食べていますと、祖母はなおも、

「ずい分、おすましだね。お菓子はおいしかつたかい」と、顔をのぞきこみました。

私はカツとして、思わず、そこにあつたさといもかなにかを、祖母の顔に投げつけました。母も女中もハツとして、私をとめました。祖母は泣いて怒りました。

其の晩、夕食のとき、祖母は一言も口をききませんし、父も黙つていました。

家中の人が私を避けているようで、悲しくてたまりませんでした。

ご飯を一ぜんしか食べないで、自分の部屋で泣いていますと、母が来て、やさしく、「おばあさんが、お風呂にはいつているから、あやまつておいで。あなたばかりが悪いとは思わないけど、目上の人に物を投げたりしたことは、本当にいけないことでしよ」というようなことを、言いました。そして、お風呂場の前まで、一しよに来てくれました。「勇気を出してね。おばあさんだつて、あなたがあやまりに来てくれるのを、本当に待つているんだから」と言われて、思い切つてはいり、手をついてあやまりました。祖母は、「ああ」と言つたきり、うしろを向いてしまいました。

部屋へかえると、母が、私の大好きな目玉焼きと、赤いいためご飯を持つてきてくれました。私は、それを、何となくさツぱりしない気持で食べました。

その後、二三日してから、祖母とはもと通り仲良く遊んだり、どこかへ連れていつてもらつたりしましたが、それから一年間ばかりは、時々そのことを想い出しては、いやな気がしたのを覚えています。（女、Y・S）

【課題】

二ツの例について考えてみよう。これを中心に話し合つてみよう。

第一例については、「幼児の教育」第四十九巻第七、八号で述べたことが、役立つと思う。第二例についても参考になるだろうが、この例を読んで、どうして子供が謝らねばならなかつたのか、その時の大人の態度に、憤りを感じる人がいるだろう。子供よりも経験をつみ、導く側にある大人が、どうして先に謝ろうとしなかつたのか。物を投げた子供の態度が悪くとも、それだけを切り離して謝らせることが、出来るものだろうか。子供の激しい行爲が、嘘をかくそうとする気持から出たのか、無実の罪をきせられた不満によるものかを、どうして見極め得なかつたのか。このような過ちを少しでも犯さぬために、私たちはどういう心掛けであつたらよいか。何を私たちが備えていたらよいのだろうか。

一義的な結論を導き出すことは、困難であつても、これらの問題を解くことによつて、どのように子供たちを導くべきか、それに役立つ指針を得ることは出来るであろう。

三

次には大人の扱い方、叱り方が、子供によい影響を与えた例を、取り上げよう。

不正と知りつつしたことを叱られて、眞剣に物事をするようになつた。

幼稚園の頃、運動会があつた。家の人たちが見にくる。先生は大変忙しそうである。私たちのやる番になつた。玉割りだつた。各組別々に、都合四ツの玉を割る。早く割つた組が勝ち、私は勝ちたかつた。

玉割りは始まつた。他の玉が既に一ッ割れた。私たちの玉は、割れ方が遅い。若し一番終りになつたら家で叱られる。私はそう思つた。

家では、三年前に父が死に、母はスパルタ式教育をしていた。兄も姉も、暴力で私にあたることが多かつた。末ッ子の私は、常に不利な立場にあつた。私は小さい時から、権威と結託する必要を、漠然と知つていたように思う。こうした気持と何か関係があつたのかも知れない。私はたまを投げるような恰好で、手にたまを持つたまま、たまと共に手を紙玉にあてた。

紙玉は破れた。三番目であつた。私は誰もみていなかつた、誰にも分らなかつたと、安心した、しかし、先生は、私たちを一番負けたことにした。母は運動会に来ていたが、その時はいなかつたらしい。

私は不正が見つかつたと気づいた。そして、顔をあかくした。同じ組のものが、三番目に割れたといつて、わめいた。私は、私の不正が、何ら役に立たなかつたことを知つた。誰が見ているか分らない、悪いことをやれば分るものだと考えた。

私は、それ以来、どんなに苦しくとも、真剣に物事をやろうとつとめるようになつた。価値判断の尺度は、私の成長と共に相対的な変化をとげている。しかし、常に、最善と思うことを努力してやつている。

幼稚園でのこの経験は、当時の写真や絵などをみるたびに、よく想い出す。

（男、T・T）

盗みをするようになつた子供の心

叱られて盗みをしなくなつた

私は、幼い頃、非常に我がままだつた。その我がままを、父母は、多くの場合、黙認していたと記憶している。

私は、隣近所の友だちの中で、いつも、腕白者であり、餓鬼大将であつた。

ところが、確か、五歳の頃であつたと思う。近所に、ものすごく腕力の強い子が、引越して来たので、私はいつの間にか、彼の手下の一人になつてしまつた。それでも、始めの中は、黙つて過ごしたが、段々、もとの腕白者として過ごした頃が懐しくなつた。そして、彼をどうにかして屈服させようと、幼い頭をしぼつた上、考え出したのが、何とか言つては母や父から、お金を持ち出すことだつた。少量ではあつたが、父母は私の言うなりにお金をくれた。

腕力の強いその子は、始めは喜んで私の手下になつていたが、三回・四回となるうちに、少しの物では私の思うように動かなくなつた。物を与えた一時のみは私に従つてもお金を私が持つていないと軽く扱つて、仲間からのけものにするようになつた。それで、私は、いつの間にか父母からの小遣いに満足せず、父母の財布からお金を盗み出すようになつた。

しかし、十二三回目の時だつたと思う。冬の朝であつた。庭には、一尺余りの雪が積つていた。私が目を覚して間もない

頃、突然、父から呼ばれ、書斎にはいつた。父母に対して恐しさを知らない私は、いつもの通り、父の側へいつた。ところが、其の場で、私は、さんざんに叱られた。私の予想しないことだつた。

私は、少しもあやまらなかつた。すると、急に、真ツ裸にされて、庭の雪の中にほうり出された。首までの雪をかき分けて、私は、不意の恐しさに逃げまわつた。向う側へ行つても、父の姿が見え、戻つてもまた、父の顔が見えた。あがきがとれなくなり、私はついに、庭の真中で、母を呼び、助けてもらつた。そして、私は、父母の前に手をついてあやまつたがそれ以来、父母に対する私の態度が変わり、無礼なまねはしなくなつたと、今でもよく言われる。このことは、私の印象にも深く残つている。私は、当時を懐想し、現在の自分の幸福と、割合素直な性質に成長し得たことを喜び、感謝の心がわく。（男、T・M）

【課　題】

二ツの例から問題を引き出してみよう。子供たちの心がどのように動くものか、いろいろと知ることが出来るだろう。子供たちを導くためには、子供たちの心理を知つていなければ充分でないわけも、分るだろう。

二ツとも成功した例であるが、何が成功をもたらしたのだろうか。成功はしたのだが、子供の扱い方について、もつと、こうしたらよいと思えるところがありはしないだろうか。これらのことも、考えてみよう。

叱るにも、叱るべき潮時がある。子供たちが、悪いことと知つており、叱られると思つている時に、叱つた場合も、また、叱らなかつた場合も、よい効果のあつた例を、私たちは既にみてきたが、叱られると子供の思うことの内容と、大人の思うことにずれがあつた場合には、どうだろうか。次の例をも併せ読んで、叱り方につき、更に研究してみよう。

大人とのずれ。叱られぬ物足りなさ。

幼稚園卒業の半年位前のことだつた。いとこにあたる三ツ年下の男の子と、私はメンコをして遊んでいた。よその子供とメンコをするのは、父母から固く禁じられていたので、私の相手はいつもその子（弟）だつた。メンコは全部私の所有で、それを分けて弟とやるのだつた。

その日も、私が勝つた。弟は、負けてもメンコを返さなかつたので、私は「僕のメンコだ」と言つて、弟が泣くのもかまわず、メンコを取り上げてしまつた。

その日の夕方、弟は僕の母に連れられて、外へ行つたが、やがて、にこにこしながら帰つて来た。手には新しいメンコを一ぱいもつていた。それを私に見せびらかした。私はカツとなり、おもちやの鉄砲につま楊子をいれて、弟の頬をめがけて、発砲した。楊子が頬にささつた。私はしまッたと思つたが、まだ何も言わない中に、母が飛んできて、傷の手当て

をした。そして、当然叱られると思つていた私に、「危いから、人に向けてうつてはいけませんよ」とだけ言つて、他には何も言わなかつた。

母は、鉄砲には偶然楊子がはいつていたのだと思つたらしかつた。

（今考えれば、母は知つていたのかとも思えるが。）私は、本当のことを言つて、あやまろうと思つたが、何んとも思つていない母の顔をみると、どうしても言えなかつた。その日から、私には、どうも母の顔をみるのが、面はゆくてならなかつた。（男、N・T）

あとがき

私は今後も、「体験記録」を中心に、研究を進めていくつもりでいる。読者がこのような記録を喜ばれるなら、いつかまた機会を得て、書こうと思う。貴重な記録を私に提供して下さる人たちも、それが広く読まれて役立つなら、嬉しいに違いないし、私はこれが、読者の「勉強教室」を育てる力になると、思つている。

保育應答研究會御案内

日時　六月十六日（土）午后一時半より（毎月第三土曜日。七月に限り第二土曜日。八月休会）

講會場　フレーベル館講堂

師　倉橋惣三先生

○皆様のお持ち寄りになる保育の実際問題につき、倉橋先生を中心とした出席者一同で互に研究しあう新しい企画です。多数の御来会をお待ちうけします。（来会御随意・会費不要）

昭和二十六年六月六日

株式会社　フレーベル館内

保育應答研究會係

新好評刊

折り紙教本

副島　ハマ著

B6二一四頁圖版六五〇箇八　定價二〇〇圓　送料一二円

製作の権威副島先生が我国独特の芸術味ゆたかな、楽しい折り紙遊びを何時までも残したい気持から、幼稚園、保育所の子供達の毎日の保育のために、親が側にねない赤坊のための眺め玩具をつくるために養護施設の不幸な子供の雨ふりのつれ〴〵を慰めるよすがとして、又小さい身体にそれ〴〵に負い切れない負担を背負つてゐる精神薄弱児施設、療育施設、教護院の子供達の日々を明るくしてやるために、同種の本の絶無である斯界に送られた新著——

『私が夜明けに説明図を書き乍ら御多幸を祈つた先生方——講習会で御眼にかゝつた先生方——保母養成所の生徒さん方——施設の子供たち——の中の誰かにこの紙一枚から生れる美しい芸術と折り紙遊びの楽しさを学びとつて頂けば、——私はこの願いをこめてこの書を皆様の御手許にお贈りいたします。』（著者序文より）

東京都千代田区神田神保町二ノ四

株式会社　フレーベル館